

## 金子幸代氏に学んで

長江 弘一

金子幸代氏の訃報に触れたのは、令和三年五月のことだった。お身体の具合が思わしくないことは人づてに聞いていたが、まだお若く、まさか、との思いであり、しばらく言葉がでなかった。

追悼を兼ねて、一人金子幸代氏の思い出を書き連ねていたところ、この度の追悼企画を教えてください、ぜひにと寄稿した次第である。冒頭、金子氏のご冥福をお祈りすると共に、氏との思い出を振り返ることで、在りし日の氏を偲びたい。

### 先生のもとで学びたい

私は富山大学人文学部の学生として文学を志していたが、当初、在籍していたのは氏が比較文学を講じていた国際文化学科とは学科が異なり、学部の講義の一つとして、文学のみならず、映画、アニメなど幅広いテーマに

興味を抱き、軽い気持ちで氏の講義を履修した。それが、金子氏との出会いであり、穏やかな語り口や幅広そうな研究テーマに触れ、この先生のもとで二年生以降学んでみたいと思い、転学科を決意し、比較文学コースの門を叩いたのだった。

ただ、一年生の後半には私は心身上の理由から大学に通うことが難しくなり、休学を余儀なくされた。二年生の四月から比較文学コースの一員として加わることはずいぶん早かった。半年間の休学生活に入り、しばらく大学そのものから遠ざかっていた。

自身の状態が良くなり、いよいよ復学となった。二年生の後期からの復帰ということで、本来一緒にコースに入るはずだった同級生（といっても、まだ面識もなかったのだが）は、すでにコースに溶け込んでいる時期である。もともと人見知りのきらいがあり、新しい環境に対して不安の強い私は、復学に際しても、うまくやっていけるかどうか大きな不安を抱えていた。

そして、ついに迎えた復学当日。金子氏の研究室の前に立ち、緊張感でいっぱいになりながらドアをノックし、氏と対面した。何を話したかは忘れたが、一緒に演習室

(人文学部には、コースごとにこういう名称の部屋があった)へ歩いていたときに、「大丈夫、みんないい人達だよ」と、氏が言われたことだけは鮮明に覚えている。この一言で、私はどれだけ救われたことか。かくして、一緒に演習室の扉を開け、所属する二年生から四年生までの歓迎を受けたのだった。その雰囲気、金子氏の言われた「大丈夫」ということは、どうやら間違っていないようだと感じた。

### 自主性を重んじる

金子氏の教育方針は、学生の自主性を重んじるということが特徴の一つだったと思う。文学解釈の発表ひとつとっても、自由にやらせ、あれこれと細かく指示されることはなかった。そして、学生がその人なりに調べ、出した結論については、良いところを褒めるというのを大切にされていた。これが、コースの、良い意味でのびのびとした雰囲気につながっていたと思う。私自身、復学してはじめて取り組んだ比較文学講読では、森鷗外の短編を一つ取り上げ、先行研究を必死に集め、読み、自分

なりの解釈を試みたが、発表が終わると、まずは良かった点をいくつも挙げていただき、大きな達成感を味わったことを覚えている。

学外研修としての東京旅行も思い出深い。卒論を控える学生に対し、資料探しとしての神保町古書店巡りや、森鷗外、夏目漱石といった文豪たちの作品の舞台となつた谷根千界隈の文学散歩、上野の鷗外ゆかりの宿での宿泊などが企画された。私も、四年生になる直前の春休みを最初に、その後何度か(休学していたため卒業には五年かかった)訪れた。

この旅行では、神保町の、見渡す限り古本屋ばかりの風景や、谷根千の下町情緒溢れ、かつ文学にゆかりのある場所に触れるという、それまでしたことのない経験をした。知的好奇心を刺激される、とはこういうことかと思うくらいであった。文学は本の中、文字で味わうもの、という考えだった私にとっては、作品の舞台を歩くというのは、文学と現実世界とをつなぐ経験だった。今でこそ、アニメや小説、ドラマの舞台を訪れるいわゆる「聖地巡礼」が広く行われているが、当時はまったくの新しい世界を見つけたような心持ちになった。この体

験が忘れられず、その後何度も個人で東京を訪れては、同じような行程を組んで楽しんだものだ。

### 学生思いの人柄

金子氏のお人柄としては、学生思いであり、また交流がお好きであったことは忘れてはならない。節目ごとのコンパはもちろん、学生を自宅に招いてのクリスマスパーティー、富山県内各所への観光などが思い出される。この原稿を書くにあたり、大学時代のメールを見返したが、称名滝、ボウリング大会、イタリアンでのランチ会など、懐かしいやりとりが沢山残っていた。

自宅で毎年開催されていたクリスマスパーティーでは、大勢の学生のために早くから得意料理の数々（カレーやオムレツなど、どれも絶品であった）を用意され、玄関のクリスマスリースをはじめ賑やかに飾り付けをされていた。招かれた学生も、楽器の演奏をしたり、得意の歌（流行歌から洋楽、演歌まで）を披露したりと、和気藹々としていた。私自身も、習って間もないキーボードを持ち、先輩のギターや歌と一緒に数曲披露したものであ

る。ジョン・レノンの『Happy Xmas』など、あの時演奏した曲は今聴いても当時の光景が思い浮かぶし、こうして書いていると金子氏の笑顔がありありと思い出される。

学生思いという点は、研究室を尋ねれば、いつでも嫌な顔一つされず、温かく迎え、とっておきのコーヒーを振る舞いながら、雑談にも、悩み事相談にも付き合ってくくださったものである。私自身、復学当初から気にかけてくださったことが身にしみだし、人間関係の悩みを打ち明けた時には真剣に聴いてくださったことをよく覚えている。いろいろあって、卒業後すぐに就職できず、自分の将来が定まっていなかったときも、学生時代と変わらず研究室に迎えてくださった。恒例行事となっていた学生による演劇発表会にも、観客として招いてくださった。

山登りが好きでもあり、レベルの高いレポートを課した際には、べ切が近づくと、もうすぐ登り切ります、と激励のメールを学生に送られたことも懐かしい。

## 本物に触れる大切さ

「本物に触れる」ことの大切さも、ことあるごとに学生に伝えておられた。東京での文学散歩もそうであろうし、学生にとつてはちよつと値がはると思われるお店での食事会もそうだろう。良いもの、本物に触れ、レベルの高い課題もやり抜き、人間として成長してほしいというのが、金子氏の気持ちだったのだ。

こうして書いていると、金子氏との思い出は尽きないし、どれだけ貴重な学生生活を送ることができたのかを、十数年経って改めて感じさせられる。大学を辞され、富山を去られても、どうされているのか気になっていたり、いつかまたお目にかかれる機会があつてほしいと願っていた。残念ながら叶わなくなつてしまつたが、金子氏との思い出を振り返れば、在りし日のお姿が目の前に浮かんでくるようで、再会を果たしたような気分になれた。

金子幸代氏の元で学べたことは、私にとって本当に大きな財産である。改めて氏に感謝をし、ご冥福をお祈りしたい。そして、今回の追悼企画をいただいた富山文学の会の皆様にも感謝したい。

(二〇〇八年卒業生)